

ムラが生んだノロ（上）

——沖繩一集落に生きる神人のライフヒストリー——

石井 宏典

要 旨

沖繩本島北部に位置するひとつのムラをフィールドにして、神行事への参与観察および神人（カミンチュ）と呼ばれる女性祭司への聞きとりを重ねてきた。本稿では、10代半ばから70年近く祭祀組織の中心となるノロを務めてきた女性のライフヒストリーをとりあげる。彼女は、国家制度に支えられていた公儀ノロの伝統とその権威が薄まりゆく時代状況のなかで、従来ノロが配置されなかったムラにおいてノロとなった。彼女がどのような経緯でムラのノロとなり、現在までどのようにして神行事を担い続けてきたのか。これらの問いに社会心理学の立場から接近する。前半部である本稿では、ムラの旧家に生まれた彼女が、病気に苦しむなかで見た夢をきっかけにして、地元のユタ（民間巫女）をはじめ周囲の大人たちによる方向付けを受けながらムラのノロに就任するまでの過程が辿られる。

1. フィールドと研究課題

1. ムラのヌル（ノロ）¹

2009年から、沖繩本島北部に位置するひとつのムラ（シマ）²をフィールドにして、ムラ単位で実施される神行事への参与観察を続けながら、神人と呼ばれる女性祭司への聞きとりを重ねてきた。その第一報（石井, 2014）では、4年にわたるシニグ行事の観察記録と神人たちの語りをもとに、行事の過去から現在までを辿り、彼女たちが個々の行事をどう意味づけ、行事を取り巻く状況変化にどのように対応してきたのかを探った³。ムラ人の多くが農の営みから離れるなかで神行事への関心が薄れ、さらに1975年の海洋博を契機としてムラ外での賃金労働に就く女性が増えるにつれて、行事がムラ全体で支えるものから神人たちが背負う小さなものになっていった。ただ、このような移り変わりのなかで、神人たちは行事の進行そのものを取り仕切るだけでなく、その準備段階にも献身的に関わることで、年間20を超える行事を減らさずに、また従来のやり方をできるだけ変えないように努めてきた。

これらムラの神行事を担う神人たちのなかで中軸となるのが、ヌルである。2014年現在

82歳になる彼女は、土地の神に手を合わせるとき、つぎのような拝みの言葉を唱えている。備瀬は、このムラの名前である。

〈豊作、健康、交通安全の祈願〉[2011-08-26] ⁴

ヌル：今日は何の拝みですよと言ってね、備瀬のクワンマガ（子孫）がね、もしも6月のウバンジュミ（粟の収穫後の行事）だったら、今日は6月のウバンジュミだからこれはニカスン、ニカスンといったらね、（このムラはかつて）備瀬と小浜2カ所ありよったさね、この2カ所のクワンマガが、…もう豊作させてもらってや、このクワンマガの健康願ひ、また豊作の祈願とってね、やっている…

いまは車あるでしょ、車があるから、また車で仕事も行くでしょ、昔は歩いて（畑に）行きよったのが。…もういまはね、この交通安全がね、イチケーリヤ、チャーウフミチドウイシミラチ（行き帰りに大きな道を通らせてください。すなわち交通安全の意）。この部落にね、帰すようにしてちょうだいとって。この豊作の祈願だけど、かならずおしまいはもうこれ入れるわけ。

彼女は数え16歳のときにムラのヌルになって以来、現在まで70年近くムラの神行事の中心にいた。1960年代までは16名を数えていた神人は、いまでは彼女を含めて3名となった。行事に参加するムラ人も著しく減った現状をこう嘆く。「ほんとナア、いろんなことありよったけどや、いまはもう、形だけ。この、うち（ヌルとしてムラに）出て始めのものを考えたらや、いまは形だけ。拝みもなんでも。…ナアーほんとや、いま、自分が出始めといまと考えたらな、天と地の差あるよ」。その一方で、務めを果たし続けてきたことへの自負と今後の決意も口にする。「備瀬は昔からの行事はひとつも捨てたことはない、ぜんぶやっている。いつまで続くかわからんけど。だけど、自分が生きているあいだは立派にやる」。

彼女がヌルとなったのは、小学校5年生のときの病気がきっかけだった。周囲の大人たちはこの病気をヌルとなるべき「シラシ（知らせ）」と解釈し、彼女もまた、夢で見せられたこともあってその解釈を受け入れた。病気にならなかったら、「ぜったいうちこの道には、うち（ヌルとしてムラに）出なかったよ。自分のもう健康のためでね、出たんであって。もうこの病気が、ほんとこの病気が治るんだったらや、もう出てもいいということで。うちのもう親はね、あのユタ（民間巫女）さん拝んだり、このユタさん拝んだり、もう大変だったよ」。

そして、自分がヌルを引き受けたのは、ムラ人たちの強い信仰に支えられていたからこそで、いまだったらできなかつたと言う。「いまの時代、いまの備瀬区だったら、うちできなかつたと思う。このときはね、この区長なんか、有志とって、いよったわけさ。この人なんか信仰、もう強かつたからできるんであってね、いまのあれだったらできなかつたはずと思う」。こうした気持ちを抱えながら、彼女はいまも行事の度にムラの^{ウバンジュ}拝所でムラの豊穡

と子孫の無事を祈りつづけている。

2. 研究の課題と視点

本稿でとりあげるノロ（祝女とも表記される）というムラの神役について、高梨（2000）の解説を要約して引用したい。

祝女は、奄美・沖縄諸島で村落祭祀を司る女性祭司の長である。琉球王国の時代、祝女は間得大君を長とする王国の祭祀制度の末端に位置づけられ、王府から就任の認可や役地の給付を受け、同時に祭祀内容の統制を受けた。その伝統を受け継ぐ祝女は、公儀祝女と呼ばれる。伝統的な公儀祝女の特徴として、つぎの7点があげられる。①大概複数のシマ（村落、ムラ）に1名で、シマごとにいる根神以下の祭祀を束ねて祭にあたる。②田港祝女のように出身のシマ（村落）を冠して呼ばれる。③原則として特定の旧家やその父系親族集団の女子に受け継がれる。④国頭地方では祝女不婚の伝承が根強いが、子を持つことは事実として忌避されなかった。⑤祝女殿内の祭祀、祭具、祝女地などを代々受け継ぐ。⑥村落祭祀、公共の祈願の担い手であり、原則として個人の祭祀・私的祈願に関わるべきでないという意識が強い。⑦原則として終身務める⁵。

1879（明治12）年の琉球王国の廃止と沖縄県の設置によって、沖縄における祭政一致的な支配体制は崩壊するが、しばらくは旧慣温存政策がとられ公儀ノロはその存続が認められた。その後、1910（明治43）年にのノロを中心とした地方神女の組織はその公的根拠を失うことになる⁶。『沖縄のノロの研究』のむすびにおいて宮城栄昌は、1979年時点の現状をつぎのように述べた。沖縄のノロ制度は現在においても、その伝統と権威を維持し、村落共同体の中核としての地位と機能を保持している。この状態が当分続くことは疑いがないが、ノロ制度が動揺し、崩壊しつつあることもまた事実である。そして、その崩壊速度は、沖縄本島においては那覇を中心とする島尻・中頭地方が早く、国頭地方は遅い⁷。

この宮城の指摘から35年が経過した現在、本研究がフィールドとする国頭郡本部^{もとぶ}町の事情はどうなっているのか。『琉球国由来記』によれば、18世紀初頭の本部間切15ムラのうち、公儀ノロが配置されていたのは8つだった⁸。近年の複数の報告を付き合わせると、1990年代の本部町ではノロが存在していたムラは5つあったことがわかる⁹。このうち瀬底と具志堅はかつて公儀ノロが配置されたムラであり、残りの備瀬、渡久地、辺名地のうち、備瀬では、後に詳しく紹介するように、公儀ノロの系譜を引かないノロが終戦後に誕生した。他の2つのムラの状況については未確認である。

沖縄の民俗宗教の担い手として、ノロや根神などのムラの神人の他に、ユタをあげなければならない。ノロが、村落の公的祭祀や共同体の祈願行事において中心的役割を果たすのにたいし、ユタは、個々の家や家族に関する運勢や吉凶の判断、禍厄の祓除、病気の平癒祈願など、民間の私的な呪術信仰の領域に関与するとされる¹⁰。こうした対照的な性格が指摘されることの多いノロとユタだが、桜井（1979）は、元来、両者の源流はひとつであったも

のが後世になって分化したとみる¹¹。すなわち、ノロをはじめとする神人の「公的祭祀領域」とユタの「民間信仰領域」とは未分化で重なっていたが、次第に分化、専門化していった。尚王朝は、ノロ制度を国家官僚体制に包括して公的生活を強調し、民間のユタを体制外へ疎外したため、両者は完全に分離した。そして現代、ノロを支えていた制度的基盤が揺らぐなかで、両者の活動領域はふたたび重なりつつあると桜井は指摘する。なお、ノロや根神を中心とするムラの祭祀組織が衰退する一方で、都市部で活動するユタが増加してきたとみられるが、それは各村落から都市への人口移動と呼応した動きといえるだろう。

さて、本稿の課題と視点を定めたい。ここで取り上げるひとりのヌルは、国家制度に支えられていた公儀ヌルの伝統とその権威が薄まりゆく時代状況のなかで、ひとつのムラにおいて誕生した。彼女はどのような経緯でムラのヌルとなり、生活環境が変化するなかでどのようにしてムラの神行事を担い続けることができたのか。そして、彼女を含む神人たちが拜みつづける行為はムラに何をもたらしているのか。これらの問いに社会心理学の立場からアプローチする。社会心理学は、社会（関係）のなかで個人が形成され、また諸個人の働きかけによって社会が構成されるという、いわば社会と個人の相互規定性を考察する学問領域である。ムラのなかでヌルが生み出され、そのヌルがまたムラを支えるといった螺旋的な循環を、彼女の生活世界に参与し、ライフヒストリーを辿ることで探ってみたい。

II. 神人の生活世界へ

1. ムラの祭祀組織とヌル

a. 家、門中、ムラ

沖縄のムラ（シマ）はかつて、土地総有制と一定期間ごとの割り替えを特徴とする地割制が敷かれていたこともあり、自立閉鎖的な生活圏が形成されていた。ムラ内婚が多くムラごとに言葉が違うといわれるほどにその独立性は高かった。ムラは、具体的な先祖を仏壇に祀るひとつひとつの家（ヤー）を基礎単位としており、各家には屋号と呼ばれる名前が付けられた。家はまた、父系の系譜を共有する門中（ムンチュー）という親族集団に位置づけられ、門中単位の祖先祭祀がウクリーという女性神役を中心に行われてきた。そしてムラ単位の神行事を担ってきたのが、ヌルを中心とするムラの神人たちである。

備瀬においても、家、門中、ムラという三層構造が人びとの生活世界を支えてきた。たとえば、ムラの神人であるヌルの場合、拜むべきヒヌカン（火の神、家の守護神）は3種ある。まず一家の主婦として家のヒヌカンに手を合わせて家人の無事を願い、ニーヤーという出身門中の元家のヒヌカンで親族一同の安寧を拜み、そしてアサギヤムートウヤーヌル殿内のヒヌカンでムラの豊作やムラ人の健康を祈願する。

『琉球国由来記』（1713年）によれば、本部間切15ムラのうち、公儀ヌルが配置されてい

たのは伊野波、具志川（浜元）、浦崎、謝花、具志堅、崎本部、瀬底、天底（後に今帰仁間切に編入）の8ムラだった。備瀬は謝花ヌルが管轄するムラで、アラサケ嶽、根所火神、神アシアゲ（アサギ）で祭祀が行われていたことが記されている。

b. ヌル、ニガミ（根神）、イガミ（居神）、そしてユタ

2014年現在、ヌル、ニガミ、イガミという3人の神人がムラの神行事を担う。かつての備瀬は、謝花の公儀ヌルが祭祀の中心にいたが、沖縄戦前後にこのヌルが亡くなると、1948年に天久千代さん（1932年生まれ）が数え16歳のときにムラのヌルになり、現在まで務めてきた。兼次松枝さん（1937年生まれ）は1963年にニガミを継承した。ユタでもある天久トシ子さん（1930年生まれ）はイガミとして神行事に参加する。3名ともにニーヤー門中を出自とする。

1960年代まではムラの祭祀組織は、ヌルを中心にして3つの門中出自の16人からなっていた。男性の神役3人以外はすべて女性が務めていた。ヌル、2人のニガミ、スマンペーフ（島の大屋子）とカジトウイという男性神役、これら中軸となる5役はニーヤー門中から出ている。その他に、ウミキ、ウミナイというそれぞれ男女の祖霊に仕える神役が具志堅門中から、また8人のイガミが仲村渠門中から出ている。残り1人はニーヤーのイガミであった。

千代さんは、10代半ばでヌルとなり神人集団の要として振る舞うことになったのだが、それはかなりの緊張を強いる役目だったにちがいない。そして、後で詳しくふれるとおり、ヌルである彼女を支えつづけたのが、ユタである玉城マツさん（1894年生まれ、故人）だった。ムラのヌルが誕生したとき、このユタは53歳だった。

2. 拝みの場所

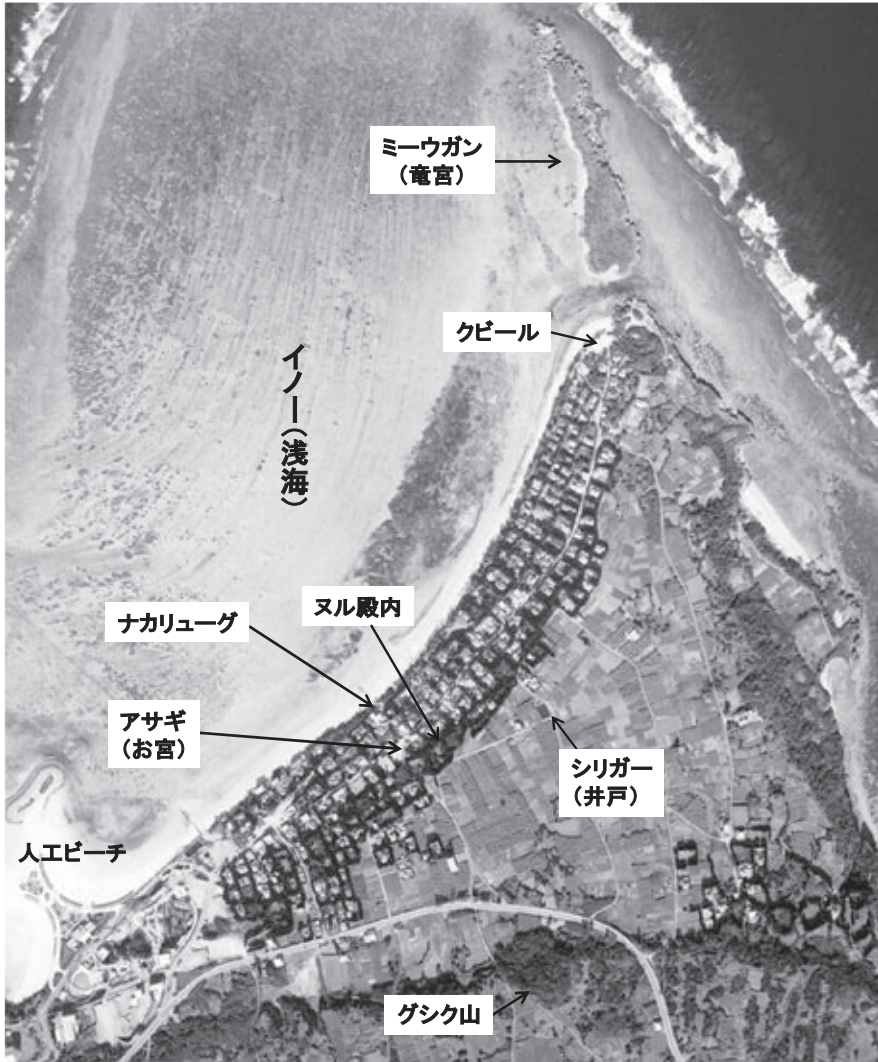
つぎに、ムラの神行事のさいに神人たちが手を合わせる多くの場所のなかで、とくに要となる所を紹介したい（図1）。

a. アサギ（お宮）

トゥヌ（殿）と呼ばれる神殿と拝殿から成り、ムラ人は両者を区別せずに「お宮」と呼ぶことが多い。殿には、ヒヌカン（火の神）が祀られ、4つのウコール（香炉）が納められている。殿の入口はふだん閉じられているが、神行事のときには開け放たれる。この中に入ることができるのは、ヌルとニガミ、そして神人を補佐するサンナムのみである。殿と拝殿の間にはウタムトゥ木と呼ばれる丸太が置かれ、その境界を示している。拝殿は、赤瓦の屋根をコンクリート柱で支え、20人ほどが座ることができる広さがある。ここは神殿に向かって拝む場所であり、また神に供えた物を下げて頂くウサンデー（直会）の場所でもある。現在の神殿は1933（昭和8）年に、拝殿はその5年後に竣工したことを伝える碑が側に立っている。

b. ニーヤー（根屋）

ニーヤー門中の元家で、門中のヒヌカン、仏壇、トコ（床）、ウタナ（御柵）がある。ウ



国土地理院撮影の空中写真(1977年撮影)を掲載

図1 備瀬の拝所

タナにはウコールが2つ置かれ、それぞれサチヌユ（先の世）とナカヌユ（中の世）の門中先祖を祀る。備瀬は「小浜」と「備瀬」という2つの系譜から成ったとされ、ニーヤーは小浜側の草分けの家である。前述のとおり、現在ムラの神人であるの3人はいずれもこのニーヤー門中を出自としており、ムラの発祥に連なる存在であるとの自覚が神行事の継続を支えている。

c. ナル殿内（ヌンドウンチ）

ニーヤーの敷地内にある5坪ほどの建物で、東側にヒヌカン、トコ、ウタナが配置されている。ウタナからは、グシク山とミーウガンに通すことができるとされる。公儀ナルが配置

されていなかった備瀬には元来ヌル殿内（ヌル火の神）はなかったが、現ヌルの指示によってメーヌヤー（前の家）と呼ばれていた建物を、ヒヌカンやウタナを祀るヌル殿内として整えた。神行事のさいには、神人たちはまずここに集まり、行事開始を報告する拝みから始める。老朽化していた瓦葺きの建物は、集落の南側に建設されることになったホテルからの援助を受け、2010年に赤瓦と白壁の建物に改築された。

d. グシク山

集落東側の畑を抜けて台地に向かう傾斜地にあるこんもりとした森。獄の神。ここは、村落発祥と深いかわりがあると思われる場所である。年頭の初御願と年末のプトゥチ（解き）御願のさいに、森の中に入って拝む。プトゥチ御願前の刈り払い清掃のとき以外は中に入って枝葉を持ち出すことなどは禁じられている。この森とシリガー（共同井戸、後述）とは水脈がつながっていて、森の木々がなくなれば井戸の水も涸れるとの認識もある。かつては森の内奥の拝所には自然石があるのみで、神人たちがその石に向かって手を合わせた。1960年代後半にコンクリート製の祠が造られると、石はその中に納められ、香炉が3つ据えられた。

e. ミーウガン

備瀬崎の先にある離れ小島。竜宮の神。作物の豊作を祈願するシンガチウブウガン四月大御願、六月大御願、9月のミャーラン御願のときに渡る。小島の先端近くの洞穴はシチガナシーと呼ばれる聖なる土が盛られた拝所で、かつて大御願のときにはこの土をさらに盛って豊作の祈願をした。現在、その盛り土はなくなっている。3つの香炉は、中央が備瀬の竜宮、左手はさまざまな作物の種をもたらした唐、さらに右手は航海安全も含めたヤマトを象徴している。現在は、4月と6月の大御願をそれぞれ20日と定めて、潮の引く午後に歩いて渡っている。天候や潮の関係で渡ることができない場合は、クビールと呼ばれる崎側の突端からお通し（遙拝）をする。

f. ナカリューグ

お宮前から西の浜辺に抜ける手前の小さな広場にある拝所。浜辺からは上り坂となっているのでサンケーバンタ（参詣坂）とも呼ばれる。お宮とミーウガンを結ぶ位置にある。コンクリートで固められた台座の中央には約50センチ四方の祠が据えられており、その祠に向かうと海とは反対の山の方角（南南西）に手を合わせる格好になる。つぎに海に向かって拝む。かつてこの下の浜から伊江島に渡る舟の安全を祈ったという。1960年代半ばまで、大御願などのときには神人を乗せた舟がこの浜からミーウガンに向けて漕ぎだした。

g. シリガー

お宮の裏手からフクギ並木を畑に抜けて北に進んだところにある共同井戸。他の井戸は、塩分を含んでいて飲料には適さなかったり、満潮時には海の中に沈んだりしてしまうが、ここはいつでも真水が汲めた。かつて正月元旦にはどの家庭でもこの井戸から若水を汲んで供えた。産水としても利用された。5月5日のカー（井泉）御願のときには、水の恩に感謝してお重を供えて拝む。かつては近くの道にはみ出るほどの人が集ったというが、2013年の



写真1 ニーガーでのカー御願（2013年）

拝みでは神人とその手伝い、区長のみ参加だった（写真1）。

3. 畑の恵みと海の恵み

お宮裏手のフクギ並木に挟まれた道をニーヤー前から少し北に行ったところに、ヌルである天久千代さんの住む家がある。南側はマンダルーチという屋号の実家に接し、東の隣接地には現在集落内でほとんど見られなくなったヤギ小屋と耕耘機の車庫がある。家の前の小道を西側に抜ければ、伊江島を望む浜に出られる。屋敷を囲むブロック塀には魔除けのモーモーナ（水字貝）が留められ、浜寄りの場所には海で使う網が掛けられている。門を入れば、シークワサーが茂り、収穫したばかりの芋や豆類が干されている。そして軒下には、畑や海で使う雑多な道具類が並べられている。この家を取り囲むこれらさまざまなモノは、ここで、自前の自給的生活が営まれていることを雄弁に物語っている。

a. 畑の恵み

千代さんは、神に仕える人であると同時に畑で働く人でもある。この2つの面を兼ね備えているからこそ、作物の豊作を願いその稔りに感謝するという姿勢を実感をもって保ちつづけることができるのだと思う。

彼女は、夜10時には床につき、朝4時には目を覚ます。まずテレビをつけて、しばらくまどろみの時間を過ごし、5時には起き出して朝ご飯を作る。朝食後に、夫の栄さんと一緒に畑に出て、午前中はずっと畑にすることが多い。自宅に戻って昼食をとった後には昼寝をすることもある。それから午後畑で出る時間は、日差しの強さや急ぎの仕事があるかないかによって変わる。

以前は夫婦で6千坪（2町歩）の畑を切り盛りしていたが、現在は自分たちの体力のこと



写真2 芋の収穫（2013年）

も考えて、集落東側にある4カ所計2500坪の畑に限っている。個々の畑の土質にあわせて、サトウキビ、芋（甘藷）、キャベツなどの換金作物をはじめ、ニンニク、ラッキョウ、カボチャ、赤ウリ、冬瓜、大根、人参、長ネギ、ソラ豆、エンドウ豆など、多品目の野菜を季節に応じて育てている（写真2）。子どもたちからは、「80歳も過ぎたのだから、もう畑はやめたら」と言われるが、毎日遊んでばかりもいられないし、何よりサトウキビや芋は貴重な収入源となっている。そして、日々の畑仕事はつねに神行事を配慮しながら進められる。千代さんたち神人は、毎月一日と十五日の拝みを加えると、年間50日近い神行事を司る。とくに7月は、盆のあと20日から一週間の行事が続く。この時期各農家はサトウキビの夏植えをする時期にあたっているのだが、千代さんたち夫婦は、一連の行事を終えてから植え付けの作業にあたるのを恒例としている。

備瀬の神行事は、作物の稔りに対応して配置されている。水が乏しく水田のなかったこのムラではかつて、主食である芋のほか、粟、黍、麦などの穀類やソラ豆、大豆などの豆類が主な作物だった。3月のウバンジュミにはトーマミ（ソラ豆）と麦、6月のウバンジュミには粟や黍、9月のミャーラン御願には打豆（小粒の大豆）というように、それぞれ収穫したものをに神の前に供えて、収穫感謝と豊作祈願の拝みをしてきた。トーマミで味噌を作り、チミアワを炊いたアワメー（粟飯）は暑い盛りの御馳走となり、打豆からは豆腐ができた。4月と6月の大御願は、すでに述べたとおり、ミーウガンにある洞穴の土（シチガナシー）を盛って作物全般の豊作を祈願するが、なかでも主食であった芋の祈願と結びついていると千代さんは話す。10月のウンネー（芋折目）行事で、牛汁と芋を供えるのは、来年に牛のような大きな芋ができるようにとの願いが込められているという。戦後しばらくまでは、これらの主要作物はたいていの家で作られていたが、農家そのものが激減した現在では、畑で



写真3 息子たちが獲ってきた魚を捌く（2013年）

目立つのももっぱらサトウキビ、芋、キャベツといった換金作物である。そんな趨勢の中で千代さんの家でもサトウキビや芋を中心に栽培しているが、行事に供えるチミアワやソラ豆も作り続けてきた。しかし、2011年の季節外れの台風によって収穫間近のチミアワが全滅してしまうと、それを機に粟作りをやめた。穀類は、周囲に作る人がなく孤立した畑だと鳥害が集中するため、豊作が望めないという事情もある。ソラ豆だけは、味噌にはしないが、いまでも作っている。

b. 海の恵み

夫の栄さんは長い間、仲間たちと追い込み漁に出ていたが、80代半ばとなったいまは息子たちに任せている。旧暦6月1日の備瀬では、孵ったばかりのスク（アイゴの稚魚）の群れが藻を求めて浅海（イノー）に入ってくる。このとき男たちは仲間と舟に乗り合わせ、われ先にと小魚の群れを探す。そして群れを見つけると先回りして、網を持って海に飛び込み、一網打尽にする。かつて集落内の漁師組は、獲れたてのスクをお宮とナカリユグに供えて、豊漁に感謝する拝みをした。いまではこの習慣は途絶えたが、千代さんは現在も、息子たちが獲ってきたスクをまず最初にお宮に供えて手を合わせている。

彼女自身も小さいころから海に行くのが好きだった。高等小学校（いまの中学に相当）時代、畑の肥料になる海藻を採りに行く父親の舟に乗って、引き潮で顔を出したリーフを歩いて貝を探した。結婚してからは、60代まで冬の夜の海にタコ獲りに出た。灯りを手にしながらリーフの上を歩いて、タコ穴を巡った。穴の中にあるタコは白い口が目印になって見つけることができるのだという。はじめは夫と行き、やがて海が好きな次女と歩いた。手に持つ灯りは、石油ランプから大型の懐中電灯に変わった。

現在、息子たちが獲ってきた魚は、浜辺で鱗と内蔵を取り除き、千代さんの家の冷凍庫に

保存する（写真3）。それを売るのはもっぱら彼女の役目で、魚が獲れたと聞きつけた隣近所の人が買いに来る。そのときには、かならず決まった分量よりも多めに入れてあげる。「きちんちはぜったいしない。斤数かけてするんだけど、1つ2つ小さいの入れて。買う人は決まってるから。人は1つでも入れたら喜ぶんだから」と笑う。

4. 聞きとりを重ねる

備瀬の神行事にヌルとして参加する千代さんの姿を初めて見たのは、1989年の四月大御願のときまで遡る。ただこのときは、お宮からナカリユグそしてミーウガンへとまわる人の群れをその最後尾に付いて歩くだけだった。その後、シニグをはじめムラの神行事を見る機会は何度か巡ってきたが、千代さんとは挨拶を交わす程度の関係にとどまっていた。それは、こちらの関心が神行事そのものには向かわなかったこともあるが、お宮で真剣に手を合わせる彼女の姿から、安易に近づけないといった雰囲気を感じ取っていたからでもあった。

最初の備瀬訪問から17年目の2005年に、千代さんとの間を取りもってくれたのは、那覇の新天地市場で衣料品店を営む上地ミエさんだった。そのころ私はこの市場をフィールドにした調査に従事しており¹²、その過程で備瀬出身のミエさんとお会い、何かとお世話になっていた。彼女は、1980年60歳のときにムラの神役のひとつを継承すると、しばらくの間、行事のたびに生まれ故郷に通っていたという。その後、正座をするのが辛くなって神人の役目からは遠ざかっていた。そんな彼女からこう問いかけられた。「先生（ミエさんは、私をそう呼んだ）は、備瀬に長らく通っているというけれど、備瀬の神様にきちんと挨拶を通したの?」。私が、「備瀬に行ったときはかならず、まず始めにお宮に行って手を合わせて挨拶をしています」と答えると、彼女はつぎのように返した。「それではダメ。きちんとヌルさんから神様に通してもらわないと。それじゃあ、来年のシニグのときにわたしが連れて行くから、ヌルさんに拝んでもらいましょう」。

そしてその言葉どおり、翌年のシニグの日、ミエさんは孫の運転する車に私を乗せて、那覇から備瀬に向かった。久しぶりに神人として神行事に参加する彼女は、芭蕉布柄の着物姿で決めていた。ヌルさんにはすでに連絡済みとのことだった。この日のフィールド日記を引用する。

2005年8月29日 旧暦7月25日シニグ

ミエさんに手招きされ、ヌルさんたちが座るアサギの中に入り座る。ヌルさんから線香を手渡され、両手でおく前に捧げるようにして拝み、サンナムに手渡す。そしてヌルさんと一緒に手を合わせ、備瀬の神様に報告、祈願する。あまりに緊張して胸が痛い。言葉にならない思いのなか、一心に手を合わせる。そして、拝み終えてからヌルさんとニガミの松枝さんに挨拶をする。穏やかな表情をみてホッとす。内心では、ヌルさんから「あんたの研究は通らんさ」と言われたらどうしようと、心配していたのだった。ミエさんにもお礼の言葉

を伝える。…

帰りの車中、「ヌルさんも喜んでいたよ」とミエさんが言ってくれる。神様の前に座ったときのなんともいえない胸が締まるような感じを伝えると、「伝わったんだ」とミエさんが返す。

このときをきっかけにして、千代さんとは近しく付き合わせてもらうようになり、2009年のシニグ行事のときには、彼女の語りを受けとめる機会に恵まれた。旧暦7月20日、神人たちは夜のウブユミマーのために午前中から公民館の炊事場で芋神酒作りを進めていた。その合間、千代さんはこれまでの歩みを聞かせてくれた。ムラにヌルとして出る前に喘息でひどく苦しんだこと、病床で白髭の翁が神様の名前を教えたこと、そして空襲とともにこの翁は去り病氣も癒えて終戦後にヌルとしてムラに出たことなどを一気に話してくれた。このときから現在まで、備瀬に行く度に彼女の話聞かせてもらうことを重ねてきた。フィールド日記からこれまでの聞きとり場面のいくつかを拾ってみる。

2009年12月28日

ヌルさん宅を訪ねると、屋敷東側のヤギ小屋で夫の栄さんと2人で堆肥をかき出す作業をしているところだった。これを畑に入れるとキャベツも甘くなると教えてくれる栄さん。作業を少し眺め、また出直しますと声をかけて離れる。

午後になって、ふたたびヌルさん宅を訪ねる。窓越しにヌルさんの姿が認められた。あがりなさいと促され、靴を脱ぐ。居間のソファーに座り、しばらくムラの行事のことなどを教えてもらう。62年間のヌルとしての務めについて聞き、以前だったらムラの神人になったような人もいまは、「みんなユタさんになっていく」との話が、とくに印象に残る。

2010年8月26日 旧暦7月18日（七月行事の前に）

午後3時すぎにヌルさん宅を訪ねると、前回と同じようにヌルさんはソファーに腰を下ろしていた。お土産のカステラを手渡し、しばし雑談の後、「教えていただきたいことがあるのです」と切り出すと、ヌルさんはテレビを消してインタビューに応じてくれる。単刀直入の質問から始め、ヌル殿内の完成、シニグのことなど、時代の変化のなかで60年余り備瀬の神行事を支えてきたヌルさんの仕事を辿る。夫が何ひとつ文句を言わないからこれまで務められたと繰り返す。畑仕事と海歩きをしながら、土地の神様に手を合わせ祈る姿勢をずっと続けてこられた、その存在の重さが伝わってくる。ムラの根元によく辿り着いた感じがする。「いつも来られてご苦労さま」との言葉ありがたい。途中から栄さんも合流して、2時間半ほどのインタビューとなった。

2011年、旧暦11月のウンネー行事からは、シニグだけでなく年中の神行事にあわせて備

瀬を訪ねるようになり、個々の行事の意味やこれまでの歩みをさらに深く教えて頂いた。つぎは、旧暦正月のシリガーへの若水汲みと元旦拝みのときの様子。

2012年1月23日 旧暦元旦の拝み

外は強風。栄さんと約束した8時5分前にサカエヤー（ヌルさん宅）に行き、一緒にシリガーに若水を汲みに行った。3合ビンに重しを付けて紐でつり下げ水を汲む。もう1人汲みに来たおじさんがいた。家に戻ると、ヌルさんに「休みなさい」と声を掛けられ、9時まで昔の正月の思い出話などを聞かせてもらう。…

11時前にヌル殿内をのぞいてみるとヌルさんとイガミのトシ子さんはすでに来ており、松枝さんを待っているところだった。「ニーヤーの角のフクギはとくに太いですね」と投げかけると、かつてニーヤー隣のフクギ伐採をめぐるひと騒動があったと教えてくれる。それは、ムラの根の場所に立つフクギへの強い思い入れを伝えるエピソードだった。松枝さん、枝美さん親子が合流し、行事をはじめ。ヌル殿内→ニーヤー→お宮→ナカリユグ→お宮→ヌル殿内という拝みの流れ。お宮での拝みを終えたとき、みんながヌルさんにウビナディ（額に若水をつけてもらい健康を祈願する）をしてもらう姿が微笑ましかった。最後にぼくもしてもらいたいと申し出ると、みんなで笑い合う。

お供えした豚の肝ゆで（レバー）は塩をつけて食べると美味しかった。ナカリユグは強風だったが海を眺めながらのユンタク（語りあい）はぜいたくな時間だった。ヌル殿内で拝みを無事終えてからも引き続き昔語りには花を咲かせる。このように、拝みの後にウサンデー（供えた物を下げて頂くこと）しながらの語りあいは昔話の伝承の時間であると、いつも思う。ヌルさんも、松枝さんもユンタクを楽しんでいた。「ビシンチュ（備瀬の人）は幸せ、こんなにして神人の方々に拝んでもらっているのだから」と言う、「そう思ってもらえるのならいいのだけれど、いまの若い人たちは関心がない」と一同。

この翌々日の正月三日の初御願に参加した後、ヌル殿内で千代さんと松枝さんに帰途に着く挨拶をすると、千代さんは「バイバーイ」とおちゃめな声を掛けてくれた。

2012年9月7日 旧暦7月21日、ウプユミマーの翌日

昼寝の途中で声をかけてしまったのだが、いつものように招いてくれる。それからは、ゆっくりと話を聞くことができた。昨日の行事についての確認をしてからは、戦中に出征する人たちがお宮で拝みをしたというエピソードについて問いかける。すると、戦死した長兄の話になって、後年浦添ようどれ近くの壕でヌジファ（抜霊儀礼）をしたことを詳細に語ってくれた。「あれ以来、兄さんが夢に出てこなくなった」とヌルさん。迎えに来てくれてお兄さんも喜んだに違いない。それにしても、ヌルさんのヌジファの話は、お兄さんとの関係だけでなく、その土地の神様、一緒に壕で亡くなった兵士たちの御霊との関係をも配慮したもの

だった。深く感心する。いつものように、聞きたいことを聞くだけでなく、話の結び方に配慮して、お互いの心（肝）が落ち着きどころを得るまで流れていく。

千代さんは、午前中は畑に出ているので、お昼過ぎに家を訪ねることが多い。家を訪ねて姿が見えないときには畑を巡ってみる。畑でその姿を見つけ近づくと、千代さんもこちらに気づき、笑顔を咲かせながらゆっくりと歩み寄ってくる。

2013年5月27日 四月大御願の前々日

ヌルさんの姿を探して畑へ。聞けば、北側の海寄りの畑にいるというのでそのまま北に歩く。栄さんとヌルさんは、芋の植え付けをしようとしたものの、あまりに天気が良く日が強すぎて植え付けには適さないで、また今度にしようと話していたところ。耕耘機の荷台にヌルさんが座り、家に戻るというので後をついて歩く。ヤギ小屋兼農具小屋の前に、大御願のウンサフ（お神酒）用に掘った小ぶりの芋が2つのビニール袋に入れられていた。そのまま家に上げてもらい、インタビュー開始。予定していた質問を投げかける。できるだけこちらからの問いかけが散漫にならないように気をつけながら、話を聞かせてもらう。

聞きとりの場所は、千代さんの自宅の居間を中心として、ときに拝みの合間のヌル殿内だったり、一仕事終えたあとの畑であったりした。彼女は日常生活では備瀬言葉中心で過ごしている。もちろん、行事のときの拝みの言葉はこの土地の言葉である¹³。そんな彼女にこちらがヤマトウグチ（共通語）で投げかけることは、ヤマトウグチで語ってもらうことを強いることになっただろう。以下の千代さんの語りに、ある種の「ぎこちなさ」を感じるとすれば、こうした事情によるところが大きい。こうした点も含め、いま記述したような関係性のなかで聞きとりの場は展開した。行事に参加した人が、「このところヌルさんは石井さんとよく話しているから、ヤマトウグチが上手になったさ」と冗談を言うのを幾度か耳にした。

III. ムラのヌルになる

1. ヌルを支えたユタ

ヌルである千代さんのライフヒストリーを辿る前に、彼女を支えたユタのことにふれたい。備瀬には近隣のムラを超えて広く知られた玉城マツというユタがいた¹⁴。彼女は午の^{うま}人というから、亡くなった時期から逆算すると、1894年（明治27）年生まれということになる。97歳のカジマヤーのお祝いもして、99歳で亡くなったという。7つか8つのときに、いたずらの落とし穴にはまり足を痛めたのが元で片足が不自由になった。姪の玉城チヨさん（ヌルさんと同名のためカタカナで表記する）によれば、10代後半にはカミダーリ（巫病）を体

験し、30代半ばまでにはユタとして依頼者相手にハンジ（相談事に対する判断）をするようになったというので、1920年代の終わりごろと思われる。以下は、チヨさんが本人から聞いた戦時体制下の「ユタ狩り」¹⁵のときの様子である。

〈ユタ・玉城マツ〉〔2010-08-27〕

チヨ：（ユタを取り締まっていた）警察からも許されたいですよ、うちのお婆さんは。…刑事ね、那覇の刑事で謝花さんという人がいたらしい、いたらしいけど。（当時は）ユタしてるいうて、とつても、もう禁じられていたらしいけど。…そのときに、うちのお婆あ（マツ）のところに、謝花刑事という人（が来た）。有名な刑事だったらしい、この謝花さんという人は。で、そこでお婆あのお家に来てから、もう、うちのお婆あをうんともう叩くようにしてもう、畳を、床を叩いてから、筵を叩いてからもう、びっくりさせようと思ったんだけど、うちのお婆あは、びくともしなかったらしい。…

こっち（床）ね、このブチ（ばち）持ってきてこれで叩いたらしいですよ、こっちを。床を叩いてから、とつても殴ったようにやったら、うちのお婆あが、「こっち叩くのわたし叩くと同じだから、わたしを叩きなさい」というて。前に、その人の前に来て、食ってかかったらしい。「わたしは生きてる間は、このユタというの、人を助けるのはやめられない。わたしは、わたしの運はもう、天からわたしに下されたものだから、わたし殺すんだったら殺しなさい」というて、食ってかかったらしいですよ。で、したら、その刑事がね、「あんたに似た人が久米島に1人いた」って。もう国々ぜんぶ歩きよったらしい、この刑事、謝花さんという人が。で、「あんたに似た人がね、久米島に1人いたけどね、あんた（がた）2人は許す」というてね、それで帰ったらしいよ。したら、またね、「人のお家行って、この刑事が、わたし（がユタをすること）を許したと言うてごらん。耳に聞こえたらまた来るよ」というて、この刑事がまた言うたらしい。…

で、（謝花刑事はムラの）散髪屋に来てから、「ものすごい女」というてね、「とつても手に負えない人だから、もう許さなければいけない」というて。「この人の運はもう天にある」ということで、帰ったらしいですよ。めずらしいことに。

彼女はユタになる前に3人の子どもを立て続けに亡くすという不幸に見舞われている。

チヨ：（叔母のマツには）私と同じ年（1919年生まれ）の息子がいたらしいですよ。この子が病気はしないのにそのまま死んでしまって。で、またね、2回目の子はね、昔の水汲む桶があったでしょう。…あれに水入れて置いてたら、その子がその中に首突っ込んで亡くなって。3番目はね、3回子ども産んで、その女の子だったらしいけどね、どうもしないけど急に亡くなったので。で、この子（の）葬式して帰ってきたらね、うちのお婆あ（マツ）が頭が狂っていたらしい。葬式から帰ってきたら、頭が狂ってしまって。で、馬鹿み

たいにもう自分で自分を笑っていたらしい。あれから変になって、ニーヤー行って、ニーヤーで歌を、うんと大きく歌をしたり、組踊りをしたり、クミムン（組踊り）やったり、いろんなことやったらしい。うちのおばあから聞いてみると、だったらしいですよ。それでいちばんしまいには、もう、（神様から）「名護親方の歴史を拜んできなさい」いうて。

神の指示に従ったこの名護行きが、ユタとしての道を切り開く契機になった。

チヨ：うちのおばあは、何にもわからないでただ歩いて、名護まで行ったというんだから。向こうにね、…この名護親方の歴史を聞いておいで（と言われて）、名護まで行かして。行ったところがアラシロというお家だったらしい。そのアラシロというお家が、天理教のお家だったらしいよ。で、「そこに行って、その人に（名護親方の歴史を）教えてもらったら、あんたはこのお礼として反物を持って行って、その人にあげなさい」いうてよ、神から教えられて行ったのが、名護のアラシロという天理教のお家だったらしい。で、向こうから人が付いてきて、お家に帰ってきたのが3日目というから。…そこでいろんな話して、帰ってきたのが3日というから、うちのおばあが言うのは。で、向こうから人がお供をしてから来たらしい。そんな話をしていた、うちのおばあ。

で、もう親戚は大騒ぎして、いなくなって、探しに行く途中で（おばあが）来たので、みんなびっくりしたという話していましたよ、うちの母が。…

彼女はそれから、「神のことをひとつひとつ自分で、自分の前を開けて」ユタとなり、「人助け」をするようになったという。

チヨ：それから、もう2、3年、4、5年したら、なんというの、心も落ち着いて。海がとっても好きで魚を自分で獲ってきて自分でやって。また機織りも上手だったので、機（で織った反物）を売ったりして、やって。で、なんというの、34、5（歳）には人を助け、人の判断をしよったらしい。

やがて彼女の元には、各地から依頼客が訪れるようになったという。ヌルとなる千代さんが生まれたとき、備瀬に住んでいたユタは彼女ひとりだった。そして、このユタは千代さんがヌルとしてムラに出る過程を支え、ヌルになってからも彼女が見る夢に解釈を与えるなど、良き助言者でありつづけた。備瀬はユタを多く輩出してきたシマだとよく言われるが、備瀬出身のユタが多くなったのは戦後になってからのことという。

2. 誕生、幼少期

ムラの草分けであるニーヤーは、お宮の背後に控えるかのような場所に位置しており、屋

敷周りのフクギは他と比べてひときわ太いものが並ぶ。ニーヤーのはす向かいが千代さんが生まれた実家で、マンダルーチ（満名殿内）という屋号が付けられている。マンダルーチという名は、先祖が満名殿内（満名は現在の本部町字並里）で勤めていたことに由来する。マンダルーチはニーヤーからの分かれで、ニーヤーはニーヤー門中の元家でもある。この両家は一時期、事情があつて備瀬の本集落から南に離れた石川原に移っていたが、千代さんの父親たちの代に元来の場所に戻ってきたという。父親は、その兄とともに山原船を操り、ムラに茅を運ぶ仕事をしていた。

〈山原船で茅を運ぶ伯父と父〉 [2012-03-07]

ヌル：うちのおとうとおじさんと2人で、山原船といってね、船持っていた。山原船といって、船持っていてね、許田（名護の地名）なんか、また国頭行って。昔はあれ、みんな茅葺きのお家でしょ。これみんなとつてきて、備瀬はもうみんなほとんどが、うちの親父なんか茅向こうから持ってきて、お家造ったといつてね、評判だったよ。兄弟2人で。こんなして生活して畑も買って、こっちで（石川原から現在地に移つて）もう生活したわけ。

この語りに登場する「おじさん」はニーヤーに住んでいた並里松吉で、スマンペーフと呼ばれる男性神役を務める人物だった。申さるの人というから1884（明治17）年の生まれということになる。彼は、千代さんがヌルを務めるころには「ニーヤーのおじい」と呼ばれ、穏やかな人柄もあつてムラ人から信頼されていた。手先が器用で、畑仕事の合間に、芋などを入れて運ぶバキ（竹籠）、脱穀に使うミーゾーキ（円箕）、アダン葉の筵、貝や小魚を入れるティンガマ（腰籠）など、さまざまな細工ものを手がけていた。

千代さんの生まれは1932（昭和7）年、この伯父と同じ申の人である。父並里米蔵と母マツの4番目の子として生まれている。この世に生まれ落ちるまでには、つぎのようなきわどい経緯があつた。

〈シマの人に拜まれる女の子〉 [2013-06-14]

ヌル：うちの母は、もうほとんどうちに話聞かせよつたわけさ。うちの、長女、長男、次男まで産んでから、これの（あと）、うちとはちょっと離れてるわけさ。これが、（そのあと自分を産むまでに）流産2回かやつたから、うち（のこと）身ごもつてからは、山行って、なんとかという木を採つて来て。このときまではあれ流産といつたらば（大変だった）。…このときまでは、お医者さんもあまり（いないし）、またお産するときには隣の人のお婆ちゃんがさせおつたわけさ。だから、あまり流産するから、もう身ごもつた子を墮ろそうと思つて、山から何の木か持ってきて、これ煎じて。熱いときには飲まれんから、明日の朝、飲むといつてこれは置いておつたつて。

だから夜はよ、うちの母によ、「あんた、自分死ぬのとね、この子ども助けるのとどつ

ちがいいか」と言っ、夢のように話する人がいたって。「あんたいま、このあんたが煎じた薬飲んだら、あんた、子どもも亡くなるし、あんたも死ぬけどね、なるべくはこれ飲まないで。もうみんなからね、備瀬の人ぜんぶから拜まれる女の子ができるから、この薬は飲むな。あんた命捨てるよ」と言っ。夜はもうこれ、夜通しこの夢で見たから、もう翌日は、この薬は、煎じたのは何も言わないでこぼしてね、やっ。だから、ちょうどもう、うち流産もしないで（生まれてきた）。

だから、備瀬でね、ちょっと向こうの…お婆ちゃんがよ、ちょっとこっち（頭）違っはいたけど、神のあれではもうほんと、備瀬の（ユタの）玉城マツさんのようにやる女の人があいたわけさ。この人がよ、うち出産してやっ（生まれた）から、この人がよ、もういろんなこと話して、どこもかも歩いてたから。この人がね、マンダルーチのマツというわけ、うちのおつかあは名前、「マツはいままでね、みんないろんな子ができたけど、今度はね、女の子がね、シマの人に拜まれる子ができたよ」と言っ、ぜんぶ一日でよ、ぜんぶ部落（をまわった）。もうちょうど放送はいまあるけど（当時はなかったから）、あの人があみんなやっきて（言っまわっ）ね、したという話はもうしょっちゅう、うちの母から聞かされよったわけさ。

だから、「あんたの命捨てるのと、子ども助けるのとどちらがいいか。あんたの子どもはね、門によ、門に飾っや」、うちすぐ連れてっ飾ってるの（夢で）見せてね、「女の子だから、備瀬の人からぜんぶ拜まれる子ができるからと、ぜったい流産はするなよ」と、しょうちゅうこれ（夢）でやっ、うち産んだということ、よく母があ聞かせよった。

聞き手：〔深く息を吐く〕。

千代さんの母があユタのマツさんに相談しところ、「夢のとおり流産させるなよ」と忠告されたという。玉城チヨさんが、マツさんから聞いた話も、このあたりのいきさつと重なる。このユタもまた、生まれてくる子がやがてムラの子孫に拜まれるヌルになるということを見通していたようだ。

チヨ：マツおばあがあね、…あのとときからはもう人助け（ユタの務め）はやっしていたらしいね、ユタというのはやっしていたらしいね、ヌルさんが生まれるときには。で、この人が、ヌルさんが生まれて3カ月とかね、いまはもう向こうのお家に石垣はないけどね、ヌルさんたちの生まれた実家は、もう門、両方とも門、石垣で高く積んでたわけよ。うちなんかがよく跳んで、ヌルさんたちのお母さんとわたしとはいとこだから。向こうに遊びに行っ、向こうから跳んで遊んだりしよったけどね。いっぺんはうちの母に怒られた…

うちのおばあがあ言うのには、ヌルさんが生まれて3カ月には、「この子は門のところにあ真っ裸で座らしておっ、この子は後には、ムラのニカスン（小浜と備瀬の2カ所）の子孫に拜ます」っ言っ。「拜む人だから、あまりやたらに扱うな」っという、親にあ忠告し

たらしい、うちのおばあが。そんな話をしていた。「後々はこの子はヌルになる子だから、やたらに扱わないで」っていうて、親に忠告したらしい。そんな話をしていた。

1938（昭和13）年、千代さんが6歳のときに、備瀬のアサギ（拝殿）が改築されている。その5年前には神殿が改築されており、各地に出稼ぎしていた人たちから送られた寄付がお宮の改築にあたり支えになったようだ。改築前のアサギは、石柱で支えられた茅葺きのもので、中に入るには腰をかかめなければならないほどの低さだった。お宮の周囲を遊び場に使っていたという千代さんは、拝殿ができたとき、周囲のコンクリートが乾かないうちに足跡を付けてしまい怒られたことをいまも覚えている。つぎの語りからは、行事のときにお宮に集まり拝む人びとに興味深げなまなざしを向けていた彼女の姿が伝わる。

〈神行事への関心〉[2009-09-08]

ヌル：うちよ、ほんとに変わっていたはず。よく備瀬の、小さいときから、家も（お宮に）近いし、備瀬の行事もよく見ていたわけさ。…（神人たちがムラの）お婆ちゃんなんかと盃して、ご馳走なんかみんなやるのを見てね、わたしも神人（に）出てこんなにされる。これだけはよおー、何か知らんわからんけどね、若いときからね、わたしもこのニーヤー（からの生まれ）だから、何か神人出てね、こんなに人と交流、あれしてやるのが、これはほんとにいいことだねと思ってや。わたしもこんなことやるという、これはね、ほんとに頭にあったの。…この人なんかやるのを見たらや、「わたしもこんなにされる人になる」といって、これだけよ、しょっちゅうありよったよ。…こっち（お宮）に親と付いて、ご馳走あるから親と付いてくるさーね。この人なんかやるのを見たらね、このご馳走、〔笑いながら〕たくさん前に置くから、もうこのときまで食べ物ないでしょ。だから、これ欲しさかわからんけどよ〔笑う〕。これ欲しさかわからん。ハァーわたしもこんな人になると思う、意志はね、ほんとにありよったよ。

3. 病と天三神様

千代さんがヌルという役目を引き受けるきっかけとなったのは、5年生のときに生じたさまざまな身体の不調だった。

〈じんま疹と喘息〉[2013-06-14]

ヌル：だからもう、小さいときはちょっとは病弱でね、入院したりいろんなことしたけど、もう1年生に入学してからは何も病気というのはなくて。もう6カ年皆勤といっただけよ。これもう、うちは6カ年皆勤ということ頭にのせているから。このとき（5年生のとき）はね、うちははや、ちょっと変だったわけ。学校にいたらこの手よ、ほんとにこんな（腫れて）大きく

なりよったよ。やって、もう手も曲げられないでね、やったけど、6カ年皆勤のことがもう頭にあるから学校行ったら、途中でね、治りよったの。

また、じんま疹といってね、顔からぜんぶしよったわけよ。で、また、向こうのユタさん（玉城マツ）にね、あの人がお祓いしよったわけ。朝早く行ってお祓いさせてね、また学校に行きよったの。もうこれがずっと続いてよ。…うちぜったい6カ年皆勤もらうということはもう頭に乘せていたから学校は行きよった、どんなことがあっても…

あとからは喘息で、もう歩けなくなるようになった、喘息で。もう喘息だったら、もう大変でしょ。喘息でね、で、病院からは気管支炎といって、もうちょっと。（隣の今婦仁村の）諸志に病院ありよったから向こうでちょっと入院したりして。もうこのときからはもう、しょっちゅうもう病院と行き帰りだったわけさ。

身体にさまざまな不調が現れても、しばらくは皆勤を目指して学校に行ったというエピソードからは、彼女の意志の強さが伝わってくる。両親は、娘の病気を治すために、隣ムラのサンジンソー（三世相、易者）に灸をさせたり、隣村の病院に入院をさせたりなど、できる限りの手を尽くした。

〈具志堅のサンジンソー〉 [2009-09-08]

ヌル：よく、うち、ユタさんのところ行きよったわけさ、親に連れられて。で、（隣ムラの）具志堅にお爺ちゃんがよ、うちも喘息も何もかもしよったけど、だからあれする人がいたわけよ、この病気の、脈触って、占いみたいにやって。…火あててするさーね。これできるかねといって、やる人がいたわけさ。

この人のところに行ったらや、わたしが来たらよ、こんな高いお膳によ、具志堅は（水田があったので）シマ米ありよったから。うち備瀬なんかはぜったい米というのはなくて、粟だけだったわけさ。この人が、うちが向こう行ったらや、かならずしもよ、お椀にね、お粥入れてきて。こんな高いお膳によ、入れてきて、うちにあげてからや、しよった。ヤーチュー（灸）しよったわけさ。灸しよったわけ。この人だけは。で、ほんと、この人に火あてていいか（と）またお祈りしてや、（神様が）いいと言ったらさせる人がいたわけ。たいへんだったよ、このときまでは。…

「すぐね、あんたに灸したらね、できないから神様にお祈りしてから、やろうね」と言っ
てよ。…上里といってね、お爺ちゃんがいたの。もうこの人の（家は）、きれいにさっぱりよ、立派に掃除してね。もうほんとによ、行って良い気持ちだった、向こう、この人のお家は。…上里さんといってね、一人暮らしだった、この人。もう、うちからみては、お爺ちゃんだったからね、戦争で亡くなったか、何なったか、ぜんぜんわからんわけよ。よくこの人のところに行きよったよ。

で、またナー、今婦仁の諸志にも病院がありよったわけさ。向こうまで歩いて行って、

歩けるまでは歩いて行ったけどね、もうとうとう喘息したときにはもう入院して。…（その後戦争になって）しょっちゅう向こう未納ありよったのにねと思ってるけどね〔笑いあう〕。未納もありよったけどねと思うけど。この先生、糸数先生といってね、だったけど、もう戦争でどこ散らばったかわからんからや。もう、ぜんぜんこの後からはもう、この糸数先生ということはもう。今帰仁、諸志に診療所あとからもできたけどね、この先生はいらっしゃらなかった。いろんな思い出があるよ。

身体の不調が続いた5年生のとき、ユタのマツさんからはムラのヌルとして出るようにと勧められていた。

〈ユタ・マツの忠告〉 [2014-05-19]

ヌル：玉城のユタさんがいらっしゃいよったでしょう。あの人に、（神様が）いろんなこと教えたよ。だからうちが病気でやったから、うちもう、いろんなことやりよったら、かならずあのお婆ちゃんのところ行ってね、あのお婆ちゃんにあれ（相談）したら、うちのもん治りよったわけ。だからまた学校に行ったり、やったから、あのお婆ちゃんもうちのことわかるから。またうちとはもう、ほんと親戚みたいにあのお婆あちゃんやってたから。うちがもう、いろんなこと（病気）やってから、もうヌルに出るといふあれはね、「もしか出なかつたら、後は大変になるよ」と言うぐらい、うちに話しよったから。またうち、喘息、いろんなことやってきたけどね、あのお婆ちゃんが（家に）来たらね、この病気ぜんぶ治る。もうほんと、いろんな話したらね、うちの病気治りよった。お婆ちゃんがいらっしゃるまで（あいだ）はよ。

聞き手：あ、その、お家に来て。

ヌル：うん。かならず家に来よったわけさ。5、6年生だけど、こんな神行事のことわからんでしょう、わからんけど、このお婆ちゃんが話したらね、自分の病気、ほんとに治りよった。

そして、喘息で苦しみ床に伏せているとき、白髭の翁が枕元に立つ。

〈天三神様〉 [2009-09-08]

ヌル：またよ、いろんな、こんな大きい、黒いよ、本持ってきてね。（自分は）もう小さいから、何気なくだけど、この本ね、ぜんぶいちいち開けて、うちに見せる人がいたわけよ。…この人がね、よく本見せて、「この字わかるね」と言ってね、ぜーんぶ見せよったの。このときにわかった。今日（本を）持ってきたら、「天」の字ね、「これわかる」と言ったら、「よし」と言ってよ。また毎晩、このお爺ちゃんが来るわけ。ちょうど水戸黄門さんのようなね、男の人が毎日わたしの枕元に来てね、うちはもうこれは怖いでしょう。恐かったから、布団よ、ほんともういま考えたらね、ほんと子どもだったねえと思うけど。ほんと

にね、座って布団被って、神様が、〔言い換えて〕この人が入らないようにとってぜんぶくつつけてね。しよったけど、もう毎晩来るわけさ。だからこの天という字やって、また翌日は「三」の字ね、またつぎは神様の「神」で、これわかって、また神様の「様」わかってね、「これだけ字読める」と言ったからね。「じゃ、これだけ読めたらいい」と言って、もうこのときからはこの人は、これだけ教えたからね、もう来なかったの、うちのところには。

だからこれ「天三神様（アマミガミサマ）」だねと思ってよ、いまでももうこの天三神様というのは、いまでもずっとこれだけは考えているけど。「これだけわかったら、よし、もうヌルのね、あれは出られる」と、この人が、あれしよったの。

もうこれでね、戦争が来て、戦争で自分の病気もなんとなく治って、もうこれから病気ということはぜんぜんしないわけさ。…これからもう病気もしない、何もしなくて、風邪も引かない。これがちょうど、いまの中学はないから、高等1年とって、つぎは高等2年卒業して、すぐこの道に出たわけよ。出たからはなんのあれもなくって〔笑う〕。

1944年10月10日、沖縄列島は初めて米軍機の空襲を受ける。備瀬の浜辺から望める伊江島の飛行場もまた標的にされた。この日はちょうど、千代さんの長兄たちがお宮で「^{ビータインビチ}兵隊餞別（入隊の報告）」の拌みをする日にあたっていた。

〈十・十空襲で喘息が消える〉[2011-08-26]

ヌル：12（歳）に病気して、…もう戦争さーね。戦争までは生きるか死ぬかの病気かかっていたわけさ。喘息で歩いたらもう息があれするし、やったけどこの空襲が来たでしょ、一回で治りよった。うん、治った。

聞き手：空襲が来たら？

ヌル：空襲、もう十・十空襲が来たでしょ。アッサヨーイ、このときはね、ゆっくり浜にいてよ、この飛行機、みんな見た。〔大きな声で〕アッサもう、ほんと話できないぐらいの飛行機だった。浜にいたら伊江島さーね、向こうからだんだんこれがね、もうずっと雲の上から歩いて、ほんともう飛行機どうしぶつからないかねーと思うぐらいの飛行機だったよ、このときは。で、これがね、雲の上から、雲がちょっとあれしたら（切れたら）見えよったけど、これがだんだん下にさがってきて、あの一だんだん下にさがってきて、やったら、もう伊江島に、突っ込んだわけさ。

うちの兄さんが、長男兄さんが、いま入隊しなくて、軍服着けて、もういま入隊はしなくて。備瀬では兵隊さんが入隊するときには、めいめい弁当作ってこの人の歓迎しよったわけ。ちょうどこのときだったわけさ、10月の10日。もう入隊するよというときに、アッサヨーイもう、この飛行機ほんととナァ、ぶつからないかねーと思うぐらいの飛行機がね、もう備瀬、伊江島の上から、もう備瀬の上からね、やって来て。これがだんだん下にさがって

きてね、また日本（の飛行機と思った）。あんなたくさんの飛行機、アメリカの種類わからんさーね、日本が勝ったとってみんなもう喜んでいるがよ、浜で見て。これがだんだんにさがってきて、伊江島にも爆弾がボンナイ、落としたわけ。これから逃げて、防空壕に行った。この空襲ね、ハイ伊江島残るかねーと思うくらい、爆弾。ほんと、戦争というのはこんなかねーと思った。

で、これからね、うちの病気がよ、（治った）。で、みんなが「なんで治ったね」と言うたから、「わたしに付いていた神様がね、天に昇った」と言った〔笑う〕。

聞き手：空襲でびっくりして？

ヌル：もう神様、わたしから抜けて天に上がったから、わたしの病気が治ったとって、みんなにこう言いおった。もう12になるけどね、12歳だったけど。治ったとってね、みんなに〔笑う〕。もうこのときからはこの喘息というのがね、まるつきり治ったわけ。

聞き手：はあー、不思議ですね。

枕元に立って「天三神様」と教えたこの白髭の翁は、「戦争だから自分は天に昇る」と言い残して去っていった。ただ、この人物が神様なのか、神様の使いなのかはわからないという。千代さんに、「そのお爺ちゃんが天に昇るときにヌルさんの病氣も持って行ってくれたんですね」と投げかけると、「うちもそう思っている」と応えた。

戦時中、千代さんは家族と一緒に嘉津^{かつ}字^うの山に避難した。やがて本部半島が米軍に占領されると、「日本は戦争に負けた」と書かれたビラが飛行機で播かれた。備瀬に戻ると、家は焼け落ちていた。伊江島と備瀬の間の海には無数の米軍艦船が浮かんでおり、それらを目がけて体当たりしようとする「友軍（日本軍）」の特攻機が打ち落とされるのを彼女は何度か目にしている。そのときの泣くような弱々しい音がいまも耳に残っているという。彼女は、山に避難したときも、その後久志村大浦崎の収容所に送られたときも、ニーヤーと実家の位牌をリュックサックに入れて背負っていた。収容所ではその2つの位牌を並べ、一日と十五日にはお茶を供えて手を合わせた。

4. ヌルとしてムラに出る

戦前の備瀬は、前述のとおり、謝花の公儀ヌルが管轄するムラだった。このヌルは、謝花国民学校の近くの家に住んでおり、備瀬の子どもたちは、運動会の予行演習のときにはこの「ヌルパッパー」の家に芭蕉に包んだ弁当を置かせてもらうのを常とした。

〈ヌルの交代〉 [2009-09-08]

ヌル：（前のヌルは）備瀬の人じゃなかった。クージ（公儀）ヌルとってね、備瀬と謝花と掛け持ちしてるヌルさんがいたわけよ。うちはニーヤーだからね、またスマンペーフはうちの伯父さんだから、よくこっちにいらっしやいよったの。だからこの人が生きている

ときにね、もうヌルの交代が、ヌルは謝花からはもう別個になるよということだったから。このお婆ちゃんなんかや、「もう、うちもこっち来るのにね大変だから、もう備瀬から出たらいよいよ」と言ってね、うちが（病気になってからヌルに）出る話（が持ち上がって）、いまヌルに出てはいなかったけどね。このあれまでは、このお婆ちゃん元気だった。

こんなこんななかったらぜったいうちの道には、うち出なかったよ。自分のもう健康のためでね、出たんであって。もうこの病気が、ほんとの病気が治るんだったらや、もう出てもいいということで。うちのもう親はね、あのユタさん拝んだり、このユタさん拝んだり、もう大変だったよ。だから、ナー、親のことはもうほんと、いくらやってももう。…（病気）だから、これに出たんであったら、ふつうだったらすぐ出なさいと言ったら、ぜったい出なかった。

謝花のヌルがいつごろ亡くなったのかはわからないが沖縄戦前後と思われる。ヌル不在となった備瀬では、千代さんがヌルになるべきとユタの玉城マツさんも判断していたが、ムラ全体が納得するためには他シマのユタによる判断と照合させることが求められた。そのため、区長をはじめムラの有志、ニーヤー門中から出ている男性神役や門中のウクリー（女性神役）たちが、今帰仁の平敷や謝名など、各地のユタのもとを訪ねた。そして、その結果はいずれも千代さんがヌルになるべきとの判断だった。しかし、彼女はまだ在学中だったため、両親をはじめ周囲の大人たちは卒業するまでヌル就任を待ってもらうことを望んだ。この間、あるユタは代理のヌルを立てるようにとのハンジを出したという。千代さんはこのことを後で母親から聞かされている。

〈卒業までの延期〉 [2014-05-19]

ヌル：うちがもう5年生、もう6年生になるときにはね、「いま学校歩くから、交代する人、もしかいたら、出したほうがいいよ」と言って、ユタさんが。こっち（玉城マツ）じゃないよ、どこか屋部（現名護市）かどこかにいた人から、「交代する人がいたら、出して、こっち（千代さんのこと）がもしも学校歩かなかつたら大変だから、交代さしてやったほうがいいよ」と言ったから。このときにうちの門中のウクリーも（そのユタのところ）に行っているわけさ。だから向こうで、3名かいたら籤引きさせたって、交代する人、わたしの代わり。で、…うちの、こっちのお家から分かれた人の、女の人ウクリー出ていたわけさ。あの人籤で当たったって。したから、向こうではもう、ユタさんの前ではね、「はい、交代して、うちがあれする（千代さんが出る）まではしますから」ということでよ。向こうではオッケーしたけど、もうこっち来てからまた報告するさーね、位牌に。報告するときになったから、もうこの人があまり怒ってよ、「アンセイ、昔からヌルはね、だんなは早く死ぬとっていうあれもあるのに、ぜったい出ない」と言ってよ。向こうではオッケーしてるわけさ、ユタさんの前では。「もうぜったい出ない」とってあれで、もう大喧

嘩するようにやったって。

だから、このときに沖島さん（後にニガミになった人）はいま（このときは）何も出ていなかったって。こっち、ちょうど門中の揃ってるところに、あの人は名護にいたから来てね、うちの母に、「あんなにやってまではや、出さないほうがいいから、神や仏んや、願いは聞くから、学校卒業したらやりますからということで、お願いしたほうがいいよ。あんなに怒られてまで出るんだったら大変よ」と言って。だから、「じゃあもう、ウヌービ（御延べ、やるべきことを延期させること）…ウヌービさせようね」と言って、（拜みを）やって。うちもう、学校も卒業して、やったわけ。

ヌルになる前、区長や両親そしてユタのマツさんたちが揃って、謝花のヌルの墓前にヌル就任の挨拶に出向いた。千代さん自身はその挨拶には同行せず、芋掘りをしているようにと両親に命じられ、ひとり畑に出ていた。北側の海を望む断崖に近い畑だったという。

〈神の使いの鷹〉[2013-05-27]

ヌル：うちの親もね、みんな（謝花に）行ったわけ。行ったら、「あんたは芋掘っておきなさいね」ということで、芋掘りに行ったから。アッサイ、鷹が、もうほんとね、もう夢かねと思うくらい、ほんとの話だけどね。ちょうど海の、うちがいま（耕している）畑の後ろ側に海あるでしょ。こっちに（いまの畑の奥にも）畑があったわけさ。畑あったからね、こっちでひとり芋掘っていたからよ。うちこんなして（頭に）手拭い被ってるわけさ。そしたら、頭の上でバーンと、ボンメカシて（ぶつかって）するから。もう、うち何もわからんわけさ。そしたら、またそば（の畑）には2人親子がいたわけさ。あの人が何か、…うちに投げて頭打ったんだねと思って見たら、あの人なんかもう、ぜんぜんうちに向いていないわけさ。だから、上向いたら、鷹が（飛んでいた）。エー、ほんとかねと思うぐらいだけどね、この鷹はもうまっすぐ行ったらいいけど、うちのところにこんなして（頭を）傾いてや、ほんと頭下げよった。

聞き手：それ、飛んで行くときっていうことですか。

ヌル：うん。このままでこんなして〔頭を下げるしぐさをしながら〕飛んで行ったわけさ、飛んで行って。うちの親なんかは謝花行ってるからや。（鷹が）こっち向いて見たから、もう、うちは芋も掘らないで、掘ってるだけ持ってきて、恐いからね。こっちはあまり海の上だから人もいないあれ（畑）だから。もう恐くて大変とって帰ってきたわけさ。

帰ってきてからね、芋掘ってないでしょ。だから親に怒られるかねと思って、（親たちが）帰ってきてじきに話したわけよ、うちは。話したから、このときにはユタさんも、お家に来て。…みんなが揃ってるなかでうちなんか話したわけさ。もう大変だったということで話したらね、ユタさんが「ほんとはあんた連れて行くべきだったのに、うち、何考えたのか、ごめんね」と言ってよ、頭下げられたこと、もう、いつも覚えている。…

ほんともう、信用しないはずだけどね。ほんともう自分がやってねはじめて、だからいまでもね、このことはもう忘れられない。…ほんとと大きなもんだったけど。これが、アッサヨー、ほんとと夢かねと思うぐらい、もう。いまでもナー。

聞き手：その鷹は何だったんでしょうね？

ヌル：そうね〔笑う〕。ユタさんはね、「あんた、どこ向いてこの鷹は行きよったね」といって聞くわけさ。だから、「東（謝花の方角）向いて行きよった」といって話したら、「あんたは、ほんととあんたが来て向こう行って、向こうのヌルさんのところまで行ってやるべきだったのにね」と言ってよ。うち、もう、ほんともう、このときにこの鷹が来てやったのはや、夢かねと思うくらい。

このあとマツさんは、鷹が当たった衝撃でマブイヌギ（魂脱げ、魂を落とした状態）になったことを心配して、魂を込め直すマブイグミの儀礼をしてくれたという。

1948（昭和23）年、子の年に千代さんは、高等小学校を卒業するとムラのヌルとなった。ムラの神役を引き受けることは「ムラに出る」と表現される。彼女がヌルとしてムラに出るときには、実家に始まり、ニーヤー、お宮、グシクなど、備瀬の拝所すべてを巡っての拝みをした。それからニーヤーの庭で盛大な祝宴となった。

当時、ムラの祭祀組織は16名の神人によって構成されていた（図2）。千代さんは年の若さもあってヌル就任当初は「恥ずかしい」という気持ちを抱えていたという。

〈恥ずかしさ〉〔2012-03-07〕

ヌル：もう若いときには、ちょっと恥ずかしいと思っていたけどや、いまは何もない。このときまではほんととヨオー、もうちょっと恥ずかしかった。だけど、このお婆ちゃんなんかね、もうほんととね、行事行事のときにはね、もう敬って、もう大変だった。うちは17、18でしょ。ほんとと言葉遣いもや、年寄りに話するようにしよった。こんなにしなくてもいいよと言うけどや。ワラビ（子ども）だからと言うけど、「うちなんかとは位くらい変わるからや」と言って、ほんととナー、備瀬の年寄りの人は大変だったよ、敬って。もういまはあれだけど、このときまではもうほんと。

聞き手：その恥ずかしくなくなったっていうのはどれぐらい、いつごろから？

ヌル：そうね、もう出て時期は16、17までは、あれやったけど。もう4、5カ年してからはね、なんとも思わなかった。みんなが敬うからね。〈ああ、そういうね。〉敬うからや。

聞き手：そういう存在なんだと、なるほど。

ヌル：いろんなことガミガミ言ったらあれだけど、こんときまではもうほんと、もう立派に敬ってしよったからね。こんときからはなんとも思わなかった。

聞き手：みんなが敬うから自然とね。なるほど、なるほど。いやー、備瀬から出た初めてのヌルさんですもんね。

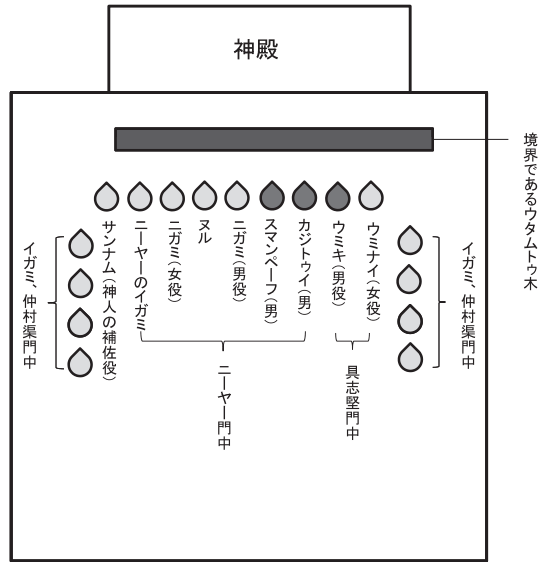


図2 拝殿での座順（●は男性、1950～60年代）

ヌル：そうって〔笑う〕。このときまでは、うちが出てるときまではもう大変だったよ。

ムラ人たちから深く敬われる体験を繰り返すなかでヌルとしての自覚が定着し、やがて恥ずかしさは消えていった。ムラの人びとのまなざしや接し方が、ヌルとしての彼女を育てたといえる。

5. 結婚

20歳のころ、千代さんは隣家に住む2歳年上の天久栄さんと結婚した。当時、ヌルは嫁ぐとその夫は早死にするなどと言い伝えられていた。しかし千代さんたちは周囲の声に臆することなく一緒になった。

〈結婚〉[2009-09-08]

ヌル：もう大変だったよ。ヌルはだんなも、人とただ1人の子だけは産めるけど、嫁いでこのお家に行くとはぜったいだめといってね、もう昔から伝えられていたの。だけど、わたしはまたこんなこと考えなかった。ムラの行事はね、だんなが理解あつてさせるんだったらや、いいことであるしや、また自分の子どもできないということはもう大変さーね、あとないから…

聞き手：じゃあ、昔のヌルさんは、よそに嫁いで、というのは？

ヌル：嫁ぐのはね、早くだんなが死んだり自分が死んだりするということね、もう…結婚はできなくて。〈あ、できないんだ。〉誰一人かとね、自分の跡継ぐ子どもは、(産む) こと

はできるんだけど、…人のお家に嫁いで行くのはぜったいだめとってよ、早くだんなが死ぬとって。もうこれが、伝えがあったわけよ。…だから、これ、(夫婦間の) いざこざなくて、うちがやるように、ムラの(行事の) こともいろんなことさせるんだったら、結婚してもいいとわたし自分で思ってたわけ、自分で。もう、よそからはもうぜったいできないとって、よそからはガミガミだけど、大変よーとって。またうちのだんなもね、「なんで結婚してね、早く死ぬんだったらいいよ」と、いうことで、やった(結婚した) わけさ。だから、いま(夫も) もう80もなるさね〔大きく笑う〕。

聞き手：いやー、そこは2人ですごい勇気だったんだねえ、いい話だ〔互いに笑いあう〕。

ヌル：うちも、うちのだんなも勇気がなかったらね、ぜったいできなかったと思う。…もう自分よりね、だんながね、「いいよ、なんで早く死んでもいい」という意志があって、やったからね。だから、(夫もいままで) もう何の文句も言わないで行事ごとはぜんぶやってるんだから、これでいいかねと。

聞き手：えー、すごい話だ。

ヌル：〔笑いながら〕昔の人はね、大変だったよ、うちが結婚するということになったらね、大変よという、よそからね(口出されて) 大変だったよ、やめなさいとって。だが、これが1人子どもできて、2人でできてするあいだにもう。うち、長女とね、長女、次女、長男、次男するまでね、(結婚して7年間は) 自分のお家だったよ。実家にて、向こうに嫁いだのはね、その子ども(4人) できてあと。また瓦のお家、自分で造って(から)、向こうに行つて、やって。いまでももう、行事ごとは(夫から) なんの文句なくてやってるんだから。

ユタのマツさんは千代さんたちの結婚を支持してくれた。ただ、その一方で、夫となる栄さんにつきのように釘を刺すことも忘れなかった。

〈神行事には文句を言わないこと〉〔2014-04-23〕

ヌル：(ヌルは参加するムラの) 行事はもうたくさんあるさーねえ、(行事は) もう1日中かかって、2日かかるときもあるから。もう7月は1週間(行事が続く) でしょう。(夫は) 「これ何一つ文句言わないでね、あんたが、行事のこと文句言わなかったら、あんたも早くは死ななくて長生きするよ」ということでよ、言われて。(いままで) 何ひとつうちに文句言わないわけさ。この神行事のものには、文句言わないけど。トオー、向こう(夫) のおじさんなんかは、ぜんぶ50代に亡くなってるわけよ。だからもう85にもなるでしょう。

わたしナァ、うちが(行事に) 行つても何の一言の文句も言わないから、このあれであんなに長生きしてるかねと思うよ。何にも文句言わないわけさ。言わないって言つてやった(結婚した) んだから〔笑いながら〕、言わないけどね。向こうの、こっちのおじさんなんかはみんな50代(までに亡くなっている)。…親が61歳(のお祝い) まではやった。

62、3ぐらいに亡くなったけど。え、おじさん、3名いるけど、みんな50代に、20代に亡くなっているよ。うちのおやじだけよ、もう80もなるし、85もなる〔笑う〕。

聞き手：結婚するときに何一つ文句言わないようになっていうのは、誰が言ったの、ヌルさんが言ったの？、そのマツさんが言ったの？

ヌル：あのユタさんが。

聞き手：あ、ユタさんが言ったんだ。あー栄さんに。

ヌル：うん。

結婚して千代さんが30歳を迎えるまでに、夫婦は2女4男と、6人の子宝に恵まれた。夫の栄さんは運よく渡久地の造船所に勤めることができた。千代さんは夫が退職するまで30年余りの間、毎日弁当を作って仕事に送り出した。

【注】

- 1 文献ではノロと表記されることも多いが、本文では先行研究の箇所を除き、現地の発音にならないヌルと表記する。
- 2 「ムラ」は、近世間切時代における村と対応する。現在の行政単位の町村（ソン）と区別するために「ムラ」と表記する。なお、神人たちは「ムラの行事」という表現をよく使う。
- 3 石井宏典〔2014〕「祈りの姿勢：ムラの神行事を守りつづける神人たち」茨城大学人文学部紀要・人文コミュニケーション学科論集16, 1-31頁。
- 4 語りを引用するさいの表記については以下のとおり。タイトル脇の〔 〕は聞きとりを行った年月日、語りの中の〈 〉内は聞き手の発話、（ ）内は著者による内容の補足、〔 〕内は著者による語り場面の補足。語りの中の…は、中略。
- 5 高梨一美〔2000〕「ヌル」福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（編）『日本民俗大辞典・下』吉川弘文館, 299頁。
- 6 宮城栄昌〔1979〕『沖縄のノロの研究』吉川弘文館, 153頁。
- 7 宮城〔1979〕, 483-494頁。
- 8 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重（編）〔1940〕『琉球資料叢書・第二』名取書店, 454-466頁。
- 9 津波高志〔1984〕「本部の民俗」本部町史編集委員会（編）『本部町史・資料編2』, 727-892頁。仲田善明〔2003〕『本部のシメグ』沖縄学研究所。その後、具志堅のヌルは亡くなったが、2014年現在、後継者は出ていない。したがって、仲田〔2003〕をふまえれば、ヌルが在住する地域は、瀬底、渡久地、備瀬の3つとなる。辺名地のヌルは沖縄市在住とある。
- 10 桜井徳太郎〔1973〕『沖縄のシャマニズム』弘文堂, 3頁。佐々木宏幹〔1980〕『シャマニズム：エクスタシーと憑霊の文化』弘文堂, 143-144頁。
- 11 桜井徳太郎〔1979〕「沖縄民俗宗教の核：祝女イヅムと巫女イヅム」沖縄文化研究6, 107-147頁。
- 12 石井宏典〔2008〕「ならいとずらしの連環：那覇新天地市場の形成と展開」サトウタツヤ・南博文編『社会と場所の経験』東京大学出版会, 45-76頁。
- 13 ムラの言葉や祭祀用語については、とくにつぎの4つの文献を参照した。仲田栄松〔1984〕『備瀬史』本部町備瀬区事務所発行および同〔2013〕『備瀬言葉』著者発行、高橋恵子〔1998〕『沖縄の御願ことば辞典』ボーダーインク、仲里長和〔2002〕『本部町字具志堅の方言』沖縄高速印刷。
- 14 桜井徳太郎〔1973〕29-59頁および138-141頁において、生前の玉城マツを含む備瀬在住のユタの

巫業について紹介されている。

- 15 大橋英寿 [1998] 『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂, 105-114頁を参照のこと。

本研究は、JSPS科研費（21530652および25380841）の助成によって支えられた。